



TITLE:

民族と社會の發達

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 民族と社會の發達. 經濟論叢 1935, 40(6): 955-974

ISSUE DATE:

1935-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130599>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 六 第 卷 十 四 第

行發日一月六年十和昭

論 叢

藝術家と課税

法學博士 神戸正雄

民族と社會の發達

文學博士 高田保馬

農産物の生産調整に就いて

經濟學博士 八木芳之助

時 論

日米貿易の調整

經濟學博士 谷口吉彦

研 究

經營分析と經營統計

經濟學士 蜷川虎三

フランスに於ける平價切下論に就いて

經濟學士 松岡孝兒

百貨店出張販賣存續の條件

經濟學士 堀 新一

說 苑

統計圖表について

經濟學士 高岡周夫

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

本誌第四十卷總目錄

民族と社會の發達

高田 保馬

一

本論に於て述べようとするところを、豫め要約する。

若し、社會の進路がある一の意志、例へば神の意志によつて左右せられてゐるとするならば、その意志の内容は次の如きものであらう。人類を平和の境地に向つて進ましめる。けれども此境地に進むまでに、民族の間に不斷なる淘汰を行ふ。而して結局、此淘汰の過程に於て殘存するところのものは個人的利益を計ることの少い民族であり、かゝる諸民族のみが愈々加はりゆく平和を樂むことが出来る。云はゞ選ばれたるもののみの平和が、眼ざすところの彼岸である。

利益社會デモクラシーは、人類社會の眼ざしてゆく彼岸である。けれども神は決して一舉にして完き利益社會を地上に實現しようとしな^い。それは地上になるべく美はしき平和を實現しようと願ふからである。それゆゑに、此利益社會化の過程に於て不斷なる淘汰を行ふ。數多の民族の間に優越と殘存との爲の競争が行はれる。而して最も共同社會的なもののみが殘存する。漸次に選ばれてゆく殘存者のみが利益社會化の完成に與る。而して、個人的利益、即ち私利を計る傾向の割合に乏

しいもののみによつて作り上げらるる利益社會に於て、はじめて、平和が許さるる限りに實現せらるるであらう。神は人類社會の利益社會化といふ過程そのものを、なるべく徐々に進行せしめようとする。而して最も利益社會化することを願はざるものを殘存せしめて、利益社會を作り上げようとする。神は必ずしも此過程そのものを最も永く眺めようと願ふのではないであらう。たゞ、利益社會をなるべく美はしきものとする爲に、云はゞ創造の工作を長くつゞけようとするのであらう。

私にとつては、これは一の比喩である。けれども、神の攝理を信ずるものが私と同様なる事象の洞察をもつならば、これを比喩としてではなく、神の意圖として信ぜざるを得ないであらう。利益社會化の過程が何故に、又如何にして行はるかについては、私の諸著書を參照せられたい。

二

私は一方に於て民族の意義を高調した。これは主として社會學組織『社會學原理』、『社會學概論』、『社會關係の研究』以外に於ける述作に於てである。而して、共同社會的なる民族のみが民族對立の間に於て、よく優勝し殘存しうるであらうことを述べた²⁾。而も他方に於ては、社會に於ける利益社會化の大勢を明にした。而して所謂極小化^{ミニムタライズ}の理論を主張し、平和と平等との將來を遙なるところに望み見た。一應の見方をする人にとつては、此二の主張は相矛盾するものの如くにも見ゆるであらう。けれども、此二は密接に相結びつき、完全に相調和してゐる。

1) 『社會關係の研究』、『國家と階級』の第一章。

2) 『社會學的研究』に收めたる「生死減少逆行の法則」、『貧者必勝』に收めたる二三論文。

3) 『社會關係の研究』。

民族の意義をはじめ述べたのは、『現代社會の諸研究』所載、「人種問題管見」。そのもの分としては、『階級考』所載、「國內の階級と國際の階級」、「人口と貧乏」所載、「生めよ殖えよ」、「貧者必勝」所載、「貧者必勝の理」、外二三の論文。

利益社會化の傾向については、これを『社會關係の研究』所載の論文中的一章、「社會關係の研究」に最も詳しく論じてゐる。社會學原理、社會學概論に於てもこれを説かなかつたわけではない。『國家と階級』所載、卷頭の論文にも論及した。これは根本に於て、テニイス、スペンサア、ジンメルなどの影響に負ふものである。

私は結合定量の法則といふものを認めざるを得ない。これは決して、個人の結合の強さ、從つて一定の社會内部に於ける結合の強さが嚴密に固定的のものであると主張するのではない。たゞ個人の結合にはこゆべからざる制限の存すること、從つて、社會に於ける結合とて何かゝる限度をもつものであることを意味する。人人の結社の傾向が本具的のものである限り、かゝる結合は自發的にしてきけがたいものであること、いふまでもない。而して、各人は其環境の事情に應じて、對他依存の態度をとり、此態度によつて、限度内のどこまで、社會的結合の中に入りこむかが定まる。社會は身分より契約に向つて進むといひ、軍事型より産業型に進むといひ、共同社會より利益社會へ、といふが如き社會發達の法則は、未だ十分なる説明を加へられてゐない。それは歴史的方向の概括にすぎぬ。これを説明し得る爲には、此法則を缺き得ないと思ふ。

テオドア・ガイガアは此法則を大體に於て承認したるものの、これを自然科学的の見方であるとなしてゐる。私は、かつてこれを發表したる場合、此結合の定量を固定不變の強さであるかの如き表現を以てした。而して對他依存の態度といふものを説き、それによつて結合への入りこみの程

度の作用せらるることを説くことを、しなかつた。自然科學的といふ規定はさういふところから來てゐるであらう。フオン・ヴィイゼは、この見解の示すが如き傾向を認めないではないが、たゞ歴史の進むにつれて結社の中に入りこむ強さも動くのではないか、といふ點から批評を加へてゐる。けれども、私はこの動きを認めぬわけではない。動きを認むるけれども、それは主として、對他依存の態度の變動から來る、結社の傾向そのものに不斷の動搖ありとも思はれぬ。而もヴィイゼが歴史の動きにつれて、結社の傾向が加はると見るのは、何等論證せられがたいことである。結合への入りこみは、寧ろ文化の高まりにつれて弱まる可能性さへを示してゐる。

ガイガアの見解は Archiv f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik, 1927 の論文にあらはれてゐる。ヴィイゼの批評はゲルン社會學四季報に於ける私の Der Weg zur Gesellschaft, Jahrbuch für Soziologie, Band III. の紹介に於て。

社會の環境(對自然的對社會的)の事情に於て、どれだけ弱く、依存を必要とするか、どれだけ強く、依存を必要とせざるか。此程度が主として對他依存の態度を決定する。弱きものは此依存の態度が強く、結合の傾向の全部をあげて結合の中に入りこむ。強きものは此傾向をある程度まで自ら抑壓して、自恃の態度をとる。而して結合の傾向のある程度だけ、結合の中に入りこむ。勢力の感じが結局に於て、此依存の態度を決定すると見得る。此態度はまた、理知がどれだけ作用するかによつて左右せらるるであらう。理知はすべての感情に對して、一應これを抑壓し禁止する作用をもつ。而して理知の判斷が肯定するもののみを是認し、それを作用せしめる。理知の

動きが社會環境の事情によつて支配せらるることは別に述べたところである。

昭和七年秋十月中旬、大阪心齋橋のほとりに、母子づれの乞食をみた。私がそれにきがついてから、警官がそれを追ひ拂ふまで約二十五分間に、綺羅をかざつた人々は幾千となく通りすぎながら、たうたう一人として一枚の銅貨をも投げなかつた。通路姿の白衣をきた人がたつた一人、何かを興へて去つた。弱いものだけが助け合つたのであらうと思つてゐる。一國の民衆の層が共同社會的であると見るデニースの見方にも味ふべきものがある(Kindnessの中にこれを述べてゐる)。

結合定量の法則と、人口増加の必然的傾向とを結びつけて考へると、利益社會化の法則が生れる(こゝまでにゆく過程の説明としては、ジンメルジンメルの社會の擴大の結果に關する所説が利用せらるべきである)。此傾向は、社會の環境の事情が所謂苦痛經濟から快樂經濟に向はしむるにつれて(パッテン)、生活内容が生産力の發達に伴うて高まるにつれて、愈々強められる。利益社會化の進むにつれて、權力による階級的差別、ひいては經濟的な勢力の差等までも弱められざるを得ぬ。ことに個性の發達と、各社會間の文化的同化は自ら外部の社會に文化的なる一面の類似をもつものを生ずるであらう。内部の團結はゆるむと共に、相互が愈々對等の地位にたち、事情の許す限り自由も確保せられる、而も外部の類似者と相結ぶ。此傾向が相當に進行するならば内部に於ける平等と自由、外部との間に於ける平和が十分に實現せらるるであらう。内部の團結の弛緩は外部との結合を強むるに役立つことも、注意すべきである。かくて利益社會化の傾向のおしつまる所は、民族の接近融和でなくてはならぬ。ウオオドの如く、民族の融合、單一化をさへ考ふるものもあるわけである。利益社會化の傾向は民族の個性をも團結をも弱むる方向に作用するの

ではないか。

利益社會化の極限を考ふることか出来る。現實の進みがそこまで達し得るか、どうかは、別に考へねばならぬであらう。所謂極小の理論から推せば、各個人が他人の單純なる手段となることはない、従つてそこには階級の組織が除かるであらう。それと共に、部分社會の團結が弛緩する。従つて部分社會的なる規範の拘束が衰へる。それだけ、個人に自由なる活動の餘地が與へられる。而も同時に、各人はかゝる部分社會的規範の拘束から離るるだけ、階級の束縛から脱するだけ合理的に行動し得るであらう。他人の手段とならず、自らの人格を目的とする。合理的に自己の目的を追求するが故に平和的であり、合理的に規範意識の命するところに動くが故に理性的である。而も最もよく自己を全體の爲に犠牲にしうるもの、ひいては規範意識の命するところに最もよく従ふものが、長き淘汰の過程に於て殘存を許さるのであるから、此殘存するものの利益社會化の極限としての人類の團結は、それによつて最も美はしく構成せらるるであらう。

結合定量、人口増加、これの必然なる結果は、長期的なる大勢として見るとき、利益社會化のほかにはあり得ない。何等かの共同社會的なるものがそれにとつて代るといふ見方は許されがたいものであると思ふ。生命共同社會が反省の加はつた、云はゞ意識によつて統一せられたものになつてゆくことはあらう。けれども、利益社會化したる社會が再び何等かの共同社會にもどるといふことは考へ得べからざることである。利益社會化そのものが永遠の課題である。辨證法的

發展の形式から第三のもの、新しき共同社會的なるものをこね上げて考へようとしても、現實の中からそれへの動きの手がかりを見出すことはできぬ。それは老人となつたものを再び何等かの若さにもどし得ないのに同じい。文化の發達につれて個性は愈々完成せられてゆく、そのことは、文化内容の愈々個性化せらるることを意味する。精神即ち文化に於ける愛着の結合は一に内容の共通から来る。個性化するほど他の個性を許すといふことはある、けれども愛着は内容の差異からは生れない。利益社會化につれて個人が獨立し、個性化のすゝむときに、精神共同社會が完成せられてゆく道理はない。マクス・セエラアの見解に限らず、利益社會が止揚せられて何等かの共同社會が代ると考ふることは、社會組織の分析の不完全さにもとづく。

マクス・セエラアは私見に對する批評を約してゐたのであるが(私信)、しかし、教授の意外に早き逝去の爲にそれをきく機會を永遠に失つてしまつた。此約束が傳へられたのは、其逝去の少しまへである。

三

これから考へようとする問題は、この利益社會化の一般的過程の中にあつて、民族が如何なる役目を營むかである。民族はつねに、一種の共同社會的なる團結であるといひ得る。利益社會化の傾向は各々の民族をも利益社會的なるものに解體しようとする。その傾向が單調に、一律に作用して、何れの民族も一齊に一步づゝ利益社會に向つて進むであらうか。思ふにさうではない。そこに民族の作用がある。民族相互の間には、結合と同時に對立があり、此對立によつて利益社

會化の工作が強く影響をうける。

こゝに於て一應、民族とは何であるかを考へねばならぬ。けれども此言葉の意味が今日の如く混亂してゐる場合に於て、私はたゞ、自らの理論を組みたつる必要上、次の如くに約束するといふ外はない。たゞ此約束を作り上げる上に於ても、普通なる用義に従ひうる限りは、従ふつもりである。

民族とは何であるか。民族とは自ら民族として意識しつゝある集團である、といふ定義は如何にも循環的説明に見える。けれども、それは民族の中核が血縁、類似等の如き、何等かの外部的特徴に存せずして、成員の意識に存することを明にしてゐる。民族から民族意識を導き出すべきではなく、民族意識から民族が導き出されるといふのは、表現に於ける不十分さを除いていふと、争ひがたき眞理を含む。民族は血縁、地縁を缺くことを得ない、何等かの血縁なく地縁なくしては民族が成立し得ない。又民族は或は文化共同體であるといはれ、運命共同體であるといはれるなるほど、民族は文化内容の共同といふ紐帶によつて結びつけられ、運命共同といふ紐帶によつて結びつけられてゐる。此意味に於て、民族は共同文化、ことに言語、宗教の共同による集團であり、血縁による結合であり、運命の共同による結合である。けれども文化の共通による集團がやがてこれ民族であるとはいへず、血縁的團結が民族であるともいへぬ。運命の共同の結合が直に民族であるともいはれ得ない（カウツキイ）。又これらのすべての紐帶による結合が民族である

ともいはれぬ。これらの外部的特徴の何れによりても、又すべてによりても民族を定義することは出来ぬ。民族の中核は成員がもつところの民族意識といふ意識的な事實の中にある。

自足的なる、また包括的な、生活共同を求むる集團がある。即ちその成員が、これをして自足的包括的な生活共同の集團たらしめようとする意識をもつ集團がある。これ最廣義に於ける民族である。かゝる意識は、單に一定の自足的、包括的範圍を貫く共屬の感情としてあらはるるに止まる場合もあるが、それが明確に意識せられ、諸方面の生活共同を實現し維持しようとする場合もある、更に進みては、此集團そのものの伸張を計らうとする場合もある。何れの場合にも、一の集團としての意識、即ち集團の自我といふ意識が伴つてゐる。前の場合に於ては漠然たる、明確なる意識に上らざる姿に於て、後の場合に於ては明確なる、又それ自體の擴充を求むる姿に於て。さて、かゝる自足的包括的生活共同を求むる集團、即ち民族としての意識こそは、民族の中核であり、これの伴ふことが、民族を他の、文化の共同、運命の共同の結合や、血縁の結合から區別せしむるものである。

要するに民族は、強制によらずして自發的に、一の自足的包括的な生活共同への要求を含むところの集團である。それに伴へる外部的特徴はもとより種々なるものである。而して此特徴即ち外部的事情の如何によつて、それが種々の段階に分たれ得よう。

こゝに自足的といふのは、それだけの成員があれば必要なだけの機能は皆營まれ得、従つて他からきりはなされても自

立しうることを意味する。また、包括的といふのはそれだけの範圍だけは残らずひつくるめて一の集團をなすことを意味する。従つてギデンイグスの *integral society* に於ける *integral* の意味がこゝにいふ自足的、包括的といふことになる。けれども、こゝにいふ民族は單に *integral society* といふべきではない。それは *spontaneous integral group* である。國家の範圍の如く、強制をまつて成立してゐる *integral society* ではない。

まづ、それは種族といふ血縁團體である、そこには文化の共同といふ紐帶も作用してゐるが、血縁の共同の上に文化の共同が築かれ、前者が後者を伴つてゐる。けれども狹義の民族は、かゝる自然的なる紐帶に基づくものではない。ある程度の血縁があるとはいふものの錯綜せる血液の混和、それに基く文化の混和、一定の時期を通じて遭逢したる共同の運命、これらによつて統一せられ、その間に前に述べたるが如き自足的包括的生活共同の要求が生れる。そこに於て、狹義の民族が成立する。それはいふまでもなく、歴史によつて作られたる民族であり、自生的なる民族ではない。歴史によつて作られたる民族にはある程度まで、文化の共同と運命の共同との紐帶が重つてゐる。それは此中核的なる民族意識をのぞいていふと、一面に於て文化共同の團結であり、他面に於て運命共同の團結である。

現代に於ては自足的なる、従つて全面的なる生活共同の要求は國家といふ組織をまちてみたされる。それ故に、一の民族をなすといふ意識は、或る場合には漠然たる姿に於て、他の場合には明確なる姿に於て、國家を形成し又は支持しようとする意識を伴ふ。これを他面からいふと、自足的にして包括的なる集團にまで高まらうとする集團的自我としての民族意識は何等かの程度に

於て國家を支持しようとする意識を伴ふ（マクイヴァ）。かくして、民族が分裂して小分せられたる國家をしかもたぬ場合には自ら統一的なる近代國家を作らうとする運動が生じ、又民族の幾つかが一の國家に統一せられてゐる場合には、各々が獨立して一の國家をもたうとする。けれども、民族が單に國家を支持するやうに作用するばかりではない。民族といふものが形成せらるるまでには、國家の統一による各部分の血液上、文化上に於ける同化、新なる共通文化の形成などの作用によつて、一の新しき民族が作り上げられた。否、狹義に於ける民族はまづ國家によりて作られたともいひうる。勿論多くの場合に於ては、此混和が社會のある階級ある集團のみに限られ、從つて民族としての意識もまた、それに限らるることであつたらう。而も一たび民族が形成せらるると、それが何等かの事情によつて分裂してゐても、容易に一の統一的なる國家をもたうとする要求をもつに至る。民族が國家に作用するのは、此段階のことである。これだけ述べて來ると、民族と國家との關係について若干の説明を加へねばならぬ。

國家はつねに成員の意志によりて支持せられる、成員は何等かの全體的組織をもち、これを支持しようとする要求、云はゞ國家支持の共同意識の上に立つてゐる。而して指導的な若干の部分又は階級が此國家組織の内容に決定を與へる。勿論、個人の意識に於ては、大抵此の二の段階が相合して一定の組織に從屬する意識として與へられる。而して、同時に國家は一の自己擴充の要求をもち、此要求は階級の要求と相合し、これによつて強められる。かゝる事情の下に於ては、

國家の中に、その他の異分子が吸収せられ、ある程度の強制によりてその組織の中に織り込まれる。此際形式上の國民、即ち國家の所屬員の全體は一の實質的な國民、即ち國家組織の支持者にまで高まらぬ。

私は今まで民族といふ言葉を廣い意味につかつて來た。而して、若し *Nation* を民族と譯するならば、それはこゝにいふ狹義の民族に當る。而して、それ以外の民族は血縁的集團としての種族であらう。 *Nation* と *Race* とのこの區別は學者によりて、まちまちであるから、その區別の詳細にはこゝに立入るまい。臼井二尚氏の論文、國民の概念(雜誌社會學第二卷)にはこれらの概念が詳密に分析せられてゐる。小松聖太郎氏の此點に關する研究もその中に公刊せらるであらう。さて若し、更に狹義なる *Nation* に國民といふ言葉をあてようとするならば、それは民族意識が反省的となり、民族としての自覺の醒め、其擴充に専念するに至るものといふべきであらう。國民は、佛蘭西革命以後のものといふのは、此意味に於てであらう。それは身分としての階級の組織が取除かれ、階級の意識が後退して、民族といふ意識が社會生活の上に於て支配的となつたことをさすのではないか。いはゞさめたる民族をさすのではないか。このことは、社會の組織が民主化すると共に成員の文化水準がある點まで同質的となること、民族としてのわれらの意識が表面に浮び上りうることを必要とする。

さて、民族の民族としての存在はその血縁にあるのではなく、同様にその特有にして共通なる文化にあるのではなく、又運命の共同そのものにあるのではない。云はゞ民族としての意識、自足的にして包括的な生活共同の集團としての意識にある。民族主義とは何かといふと、此集團の自我擴充の要求である。それに二の仕方があらう。社會的經濟的には其民族の勢力や經濟的勢力の伸張である、精神的には其精神的文化の振興である。民族主義は常に必ずしも、其特有なる文化の高調に存しないであらう。たゞそれが、此二の方面の何れか、ことに外部的なる勢力増加の方法としてこれを有利なりと認むる場合に於ては特にこれが重視せられる。特有なる文化の高調によ

りて國內の團結をつよめ、國民的自覺を促すために、血縁の純粹を求むるナチスの政策の如きも、同様なる目的に役立つものである。以前に於ける日本の如く、歐米文化の吸収こそかゝる目的に役立つとせられたる場合には、民族主義も決して特有なる文化の高調としてはあらはれ得ない。

今日、國民と國家、民族と階級、民族と世界などが對置して考へられる。國民と國家とが對置せらるるときには、國內に於ける階級的絞取の有無が考へられてゐるであらうし、民族と階級とが對置せられてゐるときには、民族としての一體の要求と階級といふ部分の要求との背馳が考へられてゐるし、民族と世界とが對置せられてゐるときには、民族主義的傾向と世界主義的傾向との對立が考へられてゐるのであらう。

今日、ツラン民族、又は民族としての白人などといふときの民族は、血縁のつながりによるある範圍の集團を考へたるものであり、その成員が民族としての意識をもつといふわけではない。全亞細亞民族といふときの如きは、民族が更に漠然たる意味をもつであらう、それはもはや、血縁の集團とすらも解しがたい。たゞかういふ名稱を云爲する人々には、これらの範圍を打つて一の國家にまで結成しようとする考方はひそんでゐるのであらう。しかしこれらは、こゝに取扱はうとする民族概念とは別異のものである。

四

世界に於ける利益社會化の流れは不斷の大勢である。而もある一定の時期例へば今日の時期をとつて考ふると、そこには、民族の對立がある、それらの相互關係は、一面に於て平和なる結合であり、協働であると共に、他面に於ては、潜在の爭鬭であり、激烈なる戰爭である。此等の民族のあるものは上昇優越の運命をたどる傍らに、他のものは衰微し、滅亡する、従つて、民族の對立はやがて民族の不斷なる興亡の循環である。即ち利益社會化の各々の段階に於て、民族の周

流がくりかへされつゝある。此周流は如何なる徑路をとるものであるか。

此周流は一面より見るとき淘汰殘存の過程である。此淘汰は一定の方法を通して行はれる。而して、此方法に於ける勝敗を決定するところの事情が根本に作用する。云ひかふれば、根本的な事情が何者を殘存せしむべきやを決定する。次ぎ次ぎに新なるものが優越せる地位を占め、やがては沒落する、そこに民族の周流が行はるるわけである。

淘汰を目ざして行はるる方法は主として戦争と、政治、詳しくいへば政治的壓迫と、經濟上の交通の中に行はるる競争、即ち賣買を通じての絞取である。前の二は、顯在的な乃至潜在的な直接の争闘であり、後者は間接にして無意識的な争闘である。勿論、人類全體の利益社會化の程度が如何なるものであるかに應じて、主要なる方法もことなり、又各々の方法もそれぞれに異なる形態をとる。低級なる社會に於ては戦争が殆ど唯一なる方法であり、文化の發達するにつれて、戦争の結果としての、及び戦争をまつまでもなく強弱判明せるものの間に於ける政治的壓迫が相互の間に行はれる。これによつて被壓迫者は其武力を殺がれ富をそがれ、進みては文化の發達をすらも阻碍せられる。而してその貢獻奉仕によつて壓迫者は其優越的地位をかためる。近代に入りて、植民地及び後進資本主義者に對する資本主義的絞取の愈々盛に行はるることは、いふまでもない。賣買による弱者の絞取は歴史の遙に早き時期から認められたところである。

此三の方法は、歴史の各段階に於て順次に支配的地位を占めてきたばかりではない。各々の形態

がまた、利益社會化ひいては社會關係の合理化の動きにつれて、異なれる姿をとる。原始鏖殺の戦争と、近代の國際法上の諸規定、ことに軍縮協定、赤十字社制度の下に於ける戦争と、其距離どれだけのものであらうか。たゞ茲には全くそれらの點に觸れぬ。

淘汰はまたかゝる對人的交渉をへずして、直接に行はるることがある。それはすべて人口學的東西である。勿論、人口學的なる事象はすべて、前にのべたるが如き争闘の上にある影響を及ぼすのであるけれども、こゝには全くその點を切りはなす。此直接なる人口學的淘汰又は隆替は今の問題の取扱に於て最も重要視すべきものである。これについては後に詳論することがあらう。

さて、かゝる民族淘汰の過程に於て、何れを残存せしむべきか、何れを優越的地位に置くべきかを決定するもの、云はゞ前述の根本的事情は何であるか。他の複雑なる副次的條件の作用をきりはなして云へば、共同社會的なるものは選まれ、利益社會化の進めるものは衰へる。然らば、それは如何なる過程によるか。

民族の興亡隆替を説明するのに、社會的事情をまたざるものがある。世界史の展開に於て、民族が次ぎ次ぎに支配的地位を占め、その固有の文化を十分に發達せしめてしまふと、自ら亡びて他のものに取り代らるるとする。此世界史的民族交代の理論も、それが交代の如何にして行はるかを明にしない。これを、一有機體の成長老衰に比較して説明しようと企つるにしても、それは比喩以上の何ものでもない。近頃デニは、民族の生殖細胞もまた老衰するといふ立場から、民

族の衰亡を全く生物學的に説明しようとしたのであるけれども、十分に首肯しがたい。それならば人類そのものが、すべての民族が、一樣に衰へないのは何故であるか、若し血液の混和に復活の作用を認むるとするならば、今日の巨大なる人口、従つて種々の異質性を包含する民族はそれの内部の混和によつてなほ新なる活力をつくり出しうるのではなからうか。要するに、民族を一の有機體の如くに考へ、其成長老衰によりて興亡を説明しようとすることは、今までのところ、比喩以上の意義をもつものといひ難い。

民族の興亡を説明するには種々の立場がありうるであらう。幾千年を通ずる地理的事情、ことに氣象の變化によつて一定地方の民族の次ぎ次ぎに興亡する所以を明にする立場がある。それに對して、人種的因子に於ける變化（たとへば混血による衰亡、淘汰過程の變化に伴ふ劣悪者殘存による衰亡）によつてこれを説明しようとする立場もある（ラプウヂアムモン）（これらについては若干の紹介を『階級考』の中に述べて置いた）。更に、生物學的立場からこれを説明することも可能である。たとへば上に述べたるデニの見解の如き、文明の衰亡の原因を、人口減少に求むるにしても、スペインサア、ダブルデイの如き個體の發達が自ら妊孕率を低下せしむるといふときには、自ら他の立場がとられ得るであらう。ヘエゲルの民族衰亡の説明はむしろ、而していふまでもないことであるが、知性（くはしくいへば精神の發展のある段階）に原因を求むるものである。一民族の文化がある點まで發達すると、自覺は社會全體の制度について反省をはじめ、個人の利益を求むること急にして、その民族は衰頹するといふ。普通に、階級衰亡の原因としてのべらるるところ、即ち支配的地位を占むるものが文弱に流れ支配の實力を失ふ故に亡びるといふ常識の見方からも、一の試論が試みられ得るであらう。私の次に試みようとする立場は、狹義に於て、社會學的なるものである。結合の姿に於ける變化から衰亡が生ずるとする。詳細のことは本文にゆづる。興亡の諸學說については、鳥取高農の井森陸平教授の研究がやがて公にせらるるであらう。

一たび優越せる地位にまで高まれる民族には二の運命がまち受けてゐる。一はその社會的沒落であり、他は人口的沒落である。優越せる地位は文化によつて、而して更に多く、其軍事的勢力

の優秀によつて得られる。而も、まづ、此民族に於ては、富が集中するだけ人口が増加するであらうし、又此人口の多くが都市に集中するであらう。富の集中は又民族をあげて一種の貴族となし、その生活程度を高むるであらう。このことは古代社會について云ふならば、征服者中の少くも支配者階級についてあてはまる。生活の向上は自ら、對他依存的態度を改めてゆく。自己の勢力をたのみ、従つて、他に向つて依存する必要を認めまいとする。生活の豊富さは自ら遊惰柔弱のものとなす傾向がある。人口の増加と生活の向上とは、利益社會的傾向をつよめ、従つて、團結の爲に一身を殉ずるといふ氣風を弱くする。遊惰の風が同一の方向に作用することもいふまでもない。かくして、優越せる民族は政治的組織と經濟的絞取とによつて、その權力と富とを擁するにしても、早晚これを維持し得ない時が来る。彼等は、其文化と富とによつて武器技術の上から補強の工作をしてゆくにしても、軍事的に其水準が低下せざるを得ない。此仕組からすると、優越者となつた民族は早晚、其優越そのことの故に、優越せる地位から辿り落つる運命をもつてゐる。

壓迫せられたる民族、從屬的地位にある民族は何によつて立上り得るか。經濟的に絞取せられ、天恵菲薄の地に追ひこまるるであらう。従つて其生活は決して豊なるを得ない、少くも優越民族に比して低い生活水準にある。此經濟的條件に對する苦闘は自ら彼等の共同社會的團結をつよめ、又其體力と敢爲の氣風とを養成する。加之、政治的壓迫と經濟的絞取とによつて自ら、優越せる

民族の文化は彼等によつて吸收せられる。優越者は其支配を容易ならしむる爲に、多くは其文化内容を弘布する、其經濟的利益の爲に生産物を賣る。このことによつて、壓迫せられたるものの文化が自ら高まらざるを得ぬ。此優越せる文化と共同社會的氣風と結びつく場合に於ては、一方には、軍事的政治的にききの優越者を凌ぐに足る力が養はるるであらう、他方には經濟的なる資力も漸次に蓄積せられうるであらう。優越者の衰亡する場合彼等はそれに取代るべき地位にある。從屬そのことの故に從屬的地位を脱却すべき運命に置かれたのである。

けれども、戦争、政治、産業の三は、決して獨立せる三の方法ではない。戦争の緩和せられたる若くは潜勢的なる姿として、政治的壓迫があり、後者の潜勢的なる姿として、通商による絞取がある。壓迫せられたる民族が經濟的交通によつて絞取せらるるのは政治的地位に於て抑壓せられたる地位を占むるが故に、鎖國を行ひ得ず、關稅を高め得ず、絞取せらるるがまゝにまかせるからである。勿論、一時的の事象としては、種々なる條約上の既定の權利に基いて、極度なる貿易上の統制を行ひうるにしても、長く支配的民族の意志に背いて、之を續くることは出來ぬであらう。

此點から考ふると、究極に於て、民族對立に於ける勝敗を決し淘汰を行ふものは、見えざる戦争にある。武力こそは優越者の資格であるけれども、それはたゞ、文化と技術とに於て、優秀なる段階に達しうるほどの條件をもちながら、而も共同社會的氣風を、最も多く保持しうるものの

側、い、い、う。

勿論、前にも述べたるが如く民族間の淘汰はかゝる社會的交渉を通じてのみ行はれず、云はゞ直接に行はれる。それはいふまでもなく、人口學的過程である。私はかつて之を人口學的征服と名づけた。今まで優越せる地位にあつた民族の衰滅は主としてこれによつて説明せられてゐる。ギリシヤ、ロオマ、バビロン、エヂプトなどに於ける文明の没落は大抵この過程に負ふものと見られてゐる。如何なる時代に於ても、地位の優越は自ら、對他依存の態度に變化を來さしめる。加之、其生活内容の豊富さは早晩理智の發達を來さずしてやまぬであらう。此等の事情に基いて、優越民族は最も利益社會化の道を急ぐ。階級的拘束の極めて嚴重であり、封鎖的であつたときには、支配的地位にある國家の内部に於ける支配者民族のみについて、このことはあてはまる。この利益社會化に伴ふ熟慮と、優越なる地位の保持の要求とは、自ら出生の制限に導くであらう。今日歐羅巴の一部、たとへば瑞典の一都市について行はれたる調査によると、今や、社會の最下層に於て、かへつて出生率が低い現象を示してゐるといふ。けれどもこれは偶々、かゝる出生制限が優越民族の全部に行はれることを示すものに外ならぬ。上流階級を滅亡せしむるといはるる傾向、別して頽廢的の傾向が此場合、即ち優勝民族の全部にあてはまり得るかどうか、それもまた考へらるべきことであらう。スペンサア——ダブルデイの法則にいふが如く、個體の發達（知力又は營養に於ける）が出生率を減少せしめるといふことも、此場合にどれだけあてはまるか、そ

れも考察を要することからである。

何れにせよ、優越せる民族に於ては、早晚出生率の減少がはじまる。而してこれが人口の停退乃至減少を示す。若し其民族が引きつゞく戦争、疫病等によりて人口を失ふときには、この傾向はことに顯著にあらはれる。人口の減少がすゞめばやがて、民族自體の衰滅となる。人口の停滯とても、自ら種々なる方面に於ける文化的活動の減衰、ことに競争の弱まりを來すであらう。他の新に興らむとする民族に於いて、人口と文化と團結と共に加はらむとする場合、此人口の停滯そのことによりて、優越的地位を失ふことは、自然の數である。

一の試論。今まで文明を築き上げた民族の中で亡びないものは漢民族だけであると云ふ。何故にさうであつたか。それは比類なき出生率の故である。出生率がいつまでも減少しない。これは其特有なる道德觀にもとづくと見られうる。ところがかゝる生々の道德はどうして生じたか。それは大家族制度、若くは更に廣くみて血族制度の故であらう。然るに他の諸國に於てはとくにこれがすたれ、又は勢を失ふのに、どうしてさうであることが出來たか。中國の國土、四億の人口を養ふだけの廣さの國土では、一の國家の統治が十分に整得ない、國土がそれにひろすぎた。そこで國民は國家を十分にたより得ない。自らたよるものが必要である。これが血族團體である。國內にいち早く利益社會的氣風が生れたのに拘はらず、血族のみは共同社會的であり、そこには緊密なる互助關係がある。これが特有の家門繁榮的生々の道德を生んだのではないか。

漢民族の文明のみが亡びざることは、戦前からすでに歐洲の識者の最も注目するところであつた。私は Schallmayer, *Vererbung u. Auslese* から、此點について最も多くのことを學んでゐる。

私はなほこれから進みて、殘存する民族の中庸なるものであることを説き、民族擴大の傾向を論じ、轉じて利益社會化の傾向と此民族周流の過程との交錯を分析しようと思ふ。けれどもそれは、次に「民族の周流」と題し一論を進めよう。